

主 題：主イエスを忘れない

聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章17-32節

- 今朝はコリント人への手紙第一、11章をお開きください。17節から32節までを読みましょう。
- 11:17 ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。
- :18 まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。
- :19 というのは、あなたがたの中でほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえないからです。
- :20 しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。
- :21 食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。
- :22 飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会を軽んじ、貧しい人たちをはずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。
- :23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、
- :24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」
- :25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」
- :26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。
- :27 したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。
- :28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。
- :29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。
- :30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。
- :31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。
- :32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。

◎コリント教会の問題

1. 教会のリーダーへの不従順 1:10~

1章に記されているように、この教会の中では人々が仲間割れし一致していなかったのです。その面では霊的ではなかったのです。というのは、聖書の中を見ると、霊的な信仰者の特徴の一つが従順だからです。主に喜んで従おうとする者、主に従順に従っている者たちは、主が教えるみことばに従順に従います。そして、教会の中にあっても、主によって立てられた者たちに従って行こうとします。ところが、この教会はそうではなかったのです。そのような問題を抱えていました。

2. 愛の欠如 11:17-22

二つ目の問題は「愛の欠如」です。必要のある人たちに対する配慮に欠けていたのです。そのことが今読んだ17節から22節に記されています。初代教会とはどのような教会だったのでしょうか？初代教会の特徴とはどのようなものでしょう？使徒の働き2章42節に四つの特徴が出て来ます。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」

(1) 彼らは使徒たちの教えを堅く守り：彼らはみことばにしっかりと根ざしていたのです。彼らは常に神のみことばが何と教えているのか？そのことをしっかり見てそのみことばに従おうとしていたのです。まさに、私たちも見做すべき信仰の態度です。

(2) 交わりをし：彼らは主に喜ばれる者となるために互いに励まし合っていました。それがここに出て来る「交わり」ということばです。「交わり」と言うと、私たちは何となく人が集まってワイワイと楽しく美味しい物を食べて雑談をしてそれで良かったと思いますが、残念ながら、それは交わりではありません。そのようなことはだれでも出来ることです。神が喜ばれる交わりとは、神によって救われた私

たちがその神を崇めることを目的に集まるものであり、同時に、集まった信仰者が互いにその信仰を高め合って行く、信仰の成長に役に立つことを互いに為して行くことです。ヘブル人への手紙の著者はそのことに関してこのように教えています。10：24-25「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。：25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」、まさに、これが神が喜ばれる交わりです。信仰においてみな成長しなければいけません。私たちはみな、成長のその過程にいます。ですから、私たちがともに集まったときに、ある時には励ましをもって、ある時にはその人の罪を責めることが必要かも知れません。そうして互いに信仰を高め合って行く、それが神が喜ばれる交わりであり、まさに、それが初代教会のクリスチャンたちが実践していたことでした。

(3) パンを裂き：彼らは聖餐式を守っていました。

(4) 祈りをして：個人でも、また群れとしても祈っていました。

このような四つの特徴を見ることが出来ます。

☆聖餐式について

今日のテキストを見ると、初代教会において、また、その後も様々な所に教会が広がって行くのですが、これらのクリスチャンたちは聖餐式を行なう前に食事をともにしていたようです。ともに集まって食事をしてから聖餐式を持ったようです。この習慣はクリスチャンだけがやっていたことではなかったのです。実は、ユダヤ人たちの中にもそのようにいっしょに集まったときに食事をするということがあったようですし、また、ギリシャやローマの様々な宗教の中にも同じようなことを見て取ることが出来ます。例えば、コリントにあったアスクレピオスの神殿、これは医術です。病気や傷を診察したり治療する医術、その女神として人々によって崇められていたそのような神殿がコリントに存在したのですが、そこには人々が集まって食事が出る三つの食堂があったと言われています。それぞれの食堂には、壁を背もたれにして座ることが出来る11の椅子があったと言います。ですから、クリスチャンだけではなくたのです。そうでない人々もそのように食事をともにするという習慣がありました。

しかし、クリスチャンにとってともに集まって食事することは、大きな意味をもっていました。なぜなら、それはこの世に対する大きな証の機会だったからです。クリスチャンがともに集まる時に、そこにはいろいろな人たちがいます。裕福な人もそうでない人もいます。物質的に恵まれている人もそうでない人もいます。クリスチャンたちはともに集まって、そして、みなで共有し合ったのです。その行為は周りの人々にとってすばらしい証となったのです。なぜなら、そこには、キリストの愛があったからです。ですから、「ユダの手紙」12節を見ると、この食事のことを「愛餐」と呼んでいます。キリストによって私たちは一つにされた、私たちは人種も関係ない、人間的な肉体的なハンデイも関係ない、年齢も性別も関係ない、私たちはキリストによってみな一つとされたということです。兄弟姉妹であるゆえに、彼らは互いの必要を補い合っていたのです。こうして、教会は世に対してすばらしいキリストの証をしていたのです。

しかし、このコリント教会にはこの件に関して大きな問題があったのです。ですから、パウロは17節でも22節でも「あなたたちをほめることは出来ません。」と言っています。この愛餐、信者の間で為された晩餐が非常に問題であったわけです。そこで「あなたがたをほめることもあるけれど、あなたがたがしているこの食事に関しては全くほめることが出来ない。」と、パウロは厳しく注意を与えているのです。そして、その後で、23節から聖餐式のことを話し始めるのです。先ほども話したように、彼らは愛餐と聖餐式を同時に行っていたのです。

23節には「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。」と書かれています。パウロは非常に興味深いことをここに記しています。パウロがここで言っていることは「私は主から直接的に教えられたことをあなたがたに教えます。」ということです。23節の初めに「私は」とあります。だれかから聞いたことではないのです。彼自身が主から直接聞き、受けたのです。主イエス・キリストご自身から私に教えられたこと、それは「直接的な啓示」と言いますが、このような啓示を自分は受けた。この教えは主ご自身から私に直接的に与えられたものだ、そのことをパウロは言うのです。

聖書が完成するまで、そのようなことが為されました。「使徒の働き」を見ると、幾つかの箇所でもパウロ自身が直接的に神から啓示を受けているところが見られます。パウロはそのことを言っているのです。「この聖餐式に関して、私は主ご自身から直接メッセージをいただいた。そして、私が教えられたことをあなたがたに今教える。」と言うのです。多くの神学者たちは、多分、「コリント人への手紙」は福音書が記される前に書かれたのであろうと言っています。ですから、確かに、福音書を見るとイエスご自身が最後の晩餐の時にこの聖餐式についての教えを為しておられますが、それよりも早くパウロ

はこのことをコリントの人たちに教えたのだらうと、そのようにも言われます。いずれにしる、主ご自身から教えられたこの聖餐式についてパウロが教える教えをいっしょに見て行きます。

A. 聖餐式の意味 23節

もう一度23節から見ると、「主イエスは、渡される夜、パンを取り、：24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。『これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。』」、25節には「夕食の後、杯をも同じようにして…」とあります。先ほども触れましたが、これはいつの出来事でしょう？聖書が教えるように「渡される夜」、つまり、イエスが十字架に架かるその前のことです。何の出来事を話しているのか、皆さんお分かりですね？「最後の晚餐」です。そこで主イエス・キリストは弟子たちといっしょに「過越の祭り」を祝っておられた。ですから、ここでパンを取って感謝をささげてそれを人々に配ることも、杯を取ってそれを配ることも、何も珍しいことではなかったのです。過越の祭りでは彼らはそのように行なったからです。

ただ違ったことは次の点です。「過越の祭り」、「過越の食事」のこのパンは、イスラエルがエジプトから脱出したことを意味していたことです。そのことを記念したのです。覚えておられますか？「過越し」とは、エジプトに下った最後の災いです。もし、その家の門柱とかもいに血が塗られていなければ、その家の初子は家畜に至るまで殺されるが、その門柱とかもいに血が塗られていたところは、主の使いが来た時にそこを過ぎ越したのです。それが「過越の祭り」です。ですから、その後人々は主の命令に従って、毎年そのことを思い出すのです。主がエジプトから自分たちを解放したことを覚え続けたのです。だから、そのために種のないパンや苦菜を食べ続けて、その当時のことを忘れないようにしっかり思い出そうということで、過越の食事を摂っていたのです。

ですから、過越の食事のパンはエジプトからの脱出を記念し、そして、過越の杯は門柱とかもいに塗られた羊の血を象徴していたのです。すべて、その過去の出来事、エジプトから脱出したそこに焦点が当たっていたのです。それを覚えるためにそれを忘れないためにです。ところが、イエスはその過越の食事の際に新しい教えを為されたのです。イエスはパンを取った時に「これは自分のからだである」と言われました。そのように24節に「これはあなたがたのための、わたしのからだです。」とあります。興味深いことは、イエスがパンを取って「これはわたしのからだです。それを象徴している。」と言われたことです。神が人となってからだをもってこの世に来てくださった、その目的がここに書かれています。「あなたがたのための」とあるように、あなたがたのために神が人として来てくださったのです。

イエスはそのことをここでお話になるのですが、パンの説明の後、杯に関してもこのように言われます。25節「この杯は、わたしの血による新しい契約です。」と、今度はこの杯は自分の血を指すと教えられたのです。ですから、私たちが先ず初めに覚えておきたいことは、それまで人々が毎年祝っていたこの「過越の祭り」、その「過越の食事」が聖餐式に代わったということです。それまで彼らはあの出エジプトを覚えてそれを思い出しながら神を見上げていました。でも、イエスは言われます。「これからはそうではない。わたしを見てわたしに感謝をささげなさい。」と、そのように教えられたのです。

B. 信仰者に求められる責任

23節から、聖餐式とはどういうものなのかを教えるだけでなく、同時に、この聖餐式に与る私たち一人ひとりの信仰者に神が求めておられる責任についても見る事が出来ます。聖餐式に与る私たちは何を覚えることが必要なのでしょう？パウロは三つのことを私たちに教えています。三つの責任があるのです。

1. 主イエスを覚えること 24-25節

ですから、このパンに関して「わたしを覚えるため、このようにしなさい。」と24節にあり、杯に関しても「これを飲むたびに、わたしを覚えるため、このようにしなさい。」と25節にあります。つまり、イエスがここで繰り返して「わたしを覚えるため」と言っているということは、イエスがあなたのために成してくださった贖いのみわざを覚えるということです。イエスの十字架のみわざをしっかりと覚えること、そのことを言われたのです。しかも、ただ私たちが頭で思い出すということではなくて、心からそのことを考えること、そこにはより深いより真剣なものが含まれています。私たちが聖餐式に着くときに、決して忘れてはならない責任の一つをそこに置いて、しっかりと主イエスを覚えることです。

2. 宣教を覚える 26節

26節「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」、私たちがイエスにお会いするそのときまで、私たちはこの地上にあってイエス・キリストのこのすばらしい救いを宣べ伝えて行く、その責任を私たちはいただいているのです。ですから、皆さんよくご存じのように「大命令」と言われていることは何ですか？宣教です。弟子を作りなさいと言われていています。出て行ってイエス・キリストの福音を伝え、それを信じた人たちが成長して、そして、

彼らがまた出て行って、またこのすばらしい福音を宣べ伝えて行くように弟子を作って行きなさいというのです。これはすべての信仰者に与えられた命令です。しかも、非常に大切であるゆえに「大命令」と言われるのです。

ですから、当然、私たち救われた者たちがすること、それはこのキリストのすばらしい福音を宣べ伝えることです。Iコリント1：23に「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、」とある通りです。でも、残念ながら、私たちはすぐにそのことを忘れてしまいます。だから、聖餐の式に与るときに私たちは、神は何のために私を救ってくださったのか？私に何を期待しておられるのか？私に何を命じておられるのか？そのことをしっかり思い出すのです。宣教の責任が私たちに与えられていることをしっかりと覚えなければいけないのです。

3. 自分の信仰を吟味すること 27-31節

なぜ、自分の信仰を吟味しなければいけないのでしょうか？27節にあるように「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すことになります。」とここには非常に厳しいことが記されています。「罪を犯すことになります。」とあります。ということは、聖書が私たちに教えることは、もし、私たちが聖餐式の場に着くときに、相応しくない状態でパンを取り杯を飲むなら、私たちは神の前に罪を犯すことになるということです。マルチン・ルターがこのように言っています。「相応しくないままでパンを食べる者は、主の聖餐に対して、神に対して、また、命令に対して主の指示に対して罪を犯すのである。」と。「ふさわしくないままで」と記されているこのことばについて考えて見ましょう。イエスは何を教えようとしていたのでしょうか？

「ふさわしくない」とは副詞ですが、これは「彼らの価値と一致しない、不適當」という意味を持ったことばです。レンスキーという神学者は「ふさわしくないとは、重さが均一でない、重さが異なるという意味だ。」と言います。「つまり、その場に着く人の心、思い、行ないが、その聖餐式の聖さと均等ではない、そういう意味だ。」と。罪をもって聖餐式の場に出て来ること、それは神の前に大きな罪だということです。なぜなら、罪をもって出て来ることは、主を崇めるのにふさわしくないからです。主を礼拝するのにふさわしくないからです。もし、礼拝するのに、神の前に立つのにふさわしくない状態であるなら私たちは罪を犯していると言うのです。

◎ふさわしくないとは？

1) 聖餐式を汚す

ごいっしょに考えて見ましょう。ルターが言ったように「ふさわしくないままで聖餐式の場に出るなら、パンを食べるなら、主の聖餐に対して罪を犯している。聖餐式を汚すことだ。」と、確かにそうです。なぜなら、聖餐式とはイエス・キリストの死、すなわち、贖いのみわざを覚えるときだからです。先ほどから見てるように、聖餐式に着くとき何をするのか？イエスが私たちのために成してくださったその救いのみわざを覚えることです。言い換えるなら、あなたのために味われたキリストの苦しみ、また、痛み、受けられた恥辱、そして、その死を覚えるのです。また、言い換えるなら、イエスの身代わりの死によって私たち自身が救われたことを感謝して、救いの主であるイエスを心から崇めることでもあるのです。

イエスが何を成してくださったのかを覚えるだけではないのです。聖餐式は私たちにとって、神に対して心から感謝し、主を崇めるその機会です。その機会に、その場所に私たちが罪をもったままで来たらどうなるでしょう？主のすばらしさを証し、主のすばらしさを称えようとしている時に、私たちが主が憎まれる罪をもっているならどうでしょう？まさに、その式自体を私たちは汚してしまいます。確かに、ふさわしくないままで私たちが聖餐式に着こうとするなら、その式自体を汚してしまうのです。

2) 主への罪

同時に、私たちが罪をもったままで聖餐式の場に出て行こうとするなら、それは主に対する大きな罪です。神に対する罪です。どのような罪でしょう？

(1) 偽善の罪

一つは偽善の罪です。なぜなら、皆さん、私たちが神の前に出て、そして、聖餐式でパンと杯をいただくときに、私たちは「神さま、感謝します。救ってくださってありがとうございます。」と言います。口でそのように言いながら、実際に行なっていることは何でしょう？もし、神が喜ばれないこと、神が憎まれることを行ない続けているなら、それは偽善ではないですか？神が憎まれている罪を放棄することをしないで、どうして「神を愛しています」と言えるのですか？偽善です。言っていることと行なっていることが全く相反するのです。罪をもったままで主の前に出ること、聖餐式に出ることは主に対する大きな罪です。偽善の罪です。

(2) 誤った神を世に証する罪

最初に話したように、神があなたを救ってくださったのは、あなたがこの神のすばらしさを世に証するためです。あなたに与えられているこの永遠の祝福がどんなにすばらしいかを世に証するためにあなたは救われたのでしょうか？だから、私たちは聖くあろうとします。なぜかと言うと、聖くあることによって、私たちは世に「私たちの神さまは聖さを愛される神です」というメッセージを送るからです。私たちが正しくあることを求めるのは、そのことによって、世に、私たちの神は正しい方だというメッセージを送るのです。私たちが愛し合うことによって、世に対して私たちの神は「愛の神」だということを伝えるのです。赦し合うことによって、私たちはこの世に対して、私たちの神は「赦しの神」だということを伝えるのです。主に信頼を置いて生きることによって、私たちは世に対して、私たちの神は「真実な、約束を必ず守られる方」だというメッセージを伝えるのです。私たちが希望を持って生きることによって、私たちは私たちの神は「不可能なことが何一つない神」だというメッセージを伝えているのです。

私たちはそのような責任を負っているのです。その私たちが罪を持ったまま、言い換えるなら、クリスチャン同志が互いにいがみ合っていたり、喧嘩したり、互いに対して悪い思いを持っていたり、悪い考えを持ったまま、また、影でだれかの悪口を言っている、そのような生き方をしながら、神の前に出て「私は神に感謝しています。」と言う、もし、そのような態度なら、あなたはその態度によって、その行ないによって、あなたの神はそのような神だということを世に証していると言うのです。

皆さん、教会を訪れる人たちは、それがクリスチャンであろうとそうでなかろうと、私たちが気付かないことに気が付きます。本当にそこに愛があるのかどうか？この人たちは口で言っているように真剣に生きているかどうか？そのことに気が付きます。私たちが望むことは、あなたの歩みがあなたの神を正しく世に証する、そのような生き方をしていることです。私たちがそのように歩んでいるなら、人々は私たちにではなく、私たちの内にいる神を見ます。私たちはそのために生きているのです。私たちがもし、教会でしていることとそれ以外でしていることが違うなら、私たちは自分の本当の姿を見ている家族に、大変な間違ったメッセージを伝えています。そのようなメッセージを伝えるなら、私たちの子どもが私たちの信仰に倣って主に従って行くのでしょうか？全く逆です。私の親は偽善者だと言います。私たちが覚えなければいけないことは、私たちが為していることは、私たちの神がどのような方かということ世の中に証しているということです。ですから、悲しいことに私たちは罪を犯します、でも、それを平気でそのままにして、そして、何もなかったかのように歩んでいるなら、私たちは間違った神のメッセージを、私たちの神はこんな方であるという誤ったメッセージをこの世に送ってしまうことになるのです。だから、罪なのです。

人々をだますことは出来ても神をだますことは出来ません。神は私たちのすべてのことをご存じです。私たちが世に伝えたいメッセージ、また、神が望んでおられることは、私たちがこの神を正しく宣べ伝えて行くことです。私たちは実際にそのようにしているかどうかです。

罪をもったままで聖餐の式に与えることは神に対する罪です。偽善の罪であり誤った神を伝える罪です。

(3) 不敬の罪

三つ目は「不敬の罪」です。神に対する尊敬の念がないのです。私たちはよく知っており口に出しても言います。「私たちの神は栄光ある聖い正しい神だ。」、「罪が全くない聖い神である。」と。その方の前に罪をもったまま出ることが出来ると思っているのは、神を恐れていないことの証拠ではないですか？主なる神に対する畏敬の念に欠けているのです。私たちは思いさなければいけないのです。罪人はだれ一人として神の前に立つことが出来ないということ、私たちは神の前に立つことが出来るような聖い者ではありません。ただ、神の一方的な恵みによって私たちは義と宣告され、そして、神の前に立つことが赦されているのです。しかし、失ってはならないのはこの神に対する畏敬の念、神への恐れです。「罪の赦しを感謝します。」と言いながら、主が憎まれる罪を犯している、その罪を愛しているのです。考えてください。主を十字架に掛けたその罪をあなたは愛している、それがどれ程大きな罪であるかを私たちは気付かなければいけないのです。その罪のために主は十字架に行かれたのです。その罪をなぜ私たちは愛するのでしょうか？

(4) 契約への罪

もう一つ付け加えるなら、四つ目は「契約に対する罪」です。契約を破る罪です。25節に「この杯は、わたしの血による新しい契約です。」とあります。「契約」とは、辞書によると「対立する複数の意思表示の合致によって成立する法律行為」です。お互いに了解した上で結ばれるものだということです。ここでイエスは「新しい契約」と言われました。それなら、当然、古い契約があるはずですが。

古い契約

古い契約とは、モーセがシナイ山で十戒を受けた後、彼がささげた犠牲の血を取って注ぎかけることで契約としたということが、出エジプト記24章に記されています。24:8「そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。「見よ。これは、これらすべてのことばに関して、主があなたがたと結ばれる契約の血である。」、神はモーセを通して人々と契約を結ばれたのです。ただし、そこには条件がありました。この律法を守り行う者には祝福があるが、守り行わない者には刑罰が伴うという条件でした。だれ一人として神の契約に忠実に沿って生きることが出来る人はいません。神の律法に100%従うことが出来る人などいません。ですから、もうすでに私たちが見て来たように、このように律法が与えられた、このような条件が与えられたということは、それによって私たちが神の前に「神さま、私にはできません。あなたのあわれみが必要です。」と、そのように神の前に助けを救いを求めて出て行くこと、それが目的なのです。

ですから、すでに見たように、ユダヤ人たちは自分で出来ると思い、そして、自分たちは正しいと思っていたのです。そこに大きな間違いがあったのです。でも、これが古い契約です。

新しい契約

しかし、ここで言われた新しい契約とは何でしょう？神との新しい関係のことです。ヘブル人への手紙9:14-15にこのように教えています。「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。:15 こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けられるためなのです。」と。動物の血によってではありません。主イエス・キリストの血しおによって罪の赦しをいただいた者と神との契約、新しい関係のことです。この救いに与った者たちが神と結んだ契約です。この方は私たちの神、私の神です。私はこの方の民であると、そのような特別な関係が約束されたのです。同時に、今見たように、このヘブル人への手紙の中で、この契約を結んだ者たち、すなわち、救われた者たちには大きな変化が生じます。みことばが言うように「私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」と、まさに、神の恵みによって救われた者たちにはこのようなことが神によって成されるのです。神のみこころに従って行こう、神に喜ばれることを為して行こう、神に心から従って行こう、仕えて行こうと、そのような思いをもって生きる者に私たちは変えられたのです。そして、感謝なことに、それを実践するために神は聖霊なる神を与えてくださったのです。私たちは恵みによって、神の助けをいただきながら、神に従い続けて行くことができるのです。

古い契約では自分の力でやらなければいけなかった。それは不可能でした。新しい契約では、神の助けをいただきながら神に従うことが出来る、そのような者へと神が私たちを変えてくださったのです。ですから、もし、私たちが罪をもったまま、それを神の前に告白しようともせず、それを悔い改めようともせず、そして、それで良いのだと思って歩んでいるなら、新しい契約を結んだ私たちはその契約を破っていることになり、なぜなら、契約を結んだ者たちは神が喜ばれるように生きる者へと変えられたからです。それは神が憎まれるものから離れることです。罪から離れることです。C・k・バレットという神学者は「ふさわしくないままパンを食べ、杯を飲むことは、キリストがご自身をささげられた目的にも、また、それを成された精神にも矛盾する。それゆえに、キリストを十字架に架けたことについて責任がある人々のうちに自分自身を置くことになり、信仰によって救いの実を得た者のうちに置くことにはならない。」と言っています。つまり、私たちがこのように罪をもったまま聖餐式に出て来ることを良しとする人々は、自らを救われたことを喜んで置いているのではなく、罪の中を歩んでいる者として置いているということです。

信仰者の皆さん、聖餐式とはあなたが救われたことを喜ぶ機会です。あなたのために救いが成されたことを心から感謝する機会です。あなたのために身代わりとなって死んでくださった主イエス・キリストの贖いのみわざを覚えて、その方に心からの感謝を現わす機会です。そのときに罪をもって出て来ることは神の御名を汚すことになり、だから、そのようなことをしないために自分を吟味しなさいとパウロは命じているのです。28節「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」

◎吟味すること

1. 自分自身の罪を吟味する

「吟味する」とは、試験する、検査する、また、分析するという意味です。自分のことを良く見なさいということです。イエスはこのように言われました。マタイの福音書5:23-24「だから、祭壇の上にお供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、:24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、

その供え物をささげなさい。」と、つまり、いけにえをささげるときに、もし、あなたの内に罪があることを思い出したなら、それを解消しなさいと言うのです。罪をもったまま神の前に出ても、神はその供え物を喜んでお受けにはならないからです。ということは、もし今、あなたが心の中に何かの罪を抱えてこの場に来られているなら、あなたがささげている賛美も感謝も神はお受けにならないということです。罪をもったままで神を崇めることなど出来ないのです。

私たちは一概に「罪」と言いますが、そこにはいろいろなものがあります。悪い考え、悪い思い、兄弟姉妹に対して悪い思いを持ったり、彼らを恨んだり、彼らを軽蔑してしまうことは兄弟姉妹に対しての罪ですね。また、愛についてはどうですか？人を愛さない、赦さない、これも罪です。また、不従順、つまり、神の命令に逆らっていること、神の命令に従わないことです。先ほども見た通り、「大命令」とは何でしたか？弟子を作りなさい、キリストを証して彼らの成長を促して行きなさいということです。もし、私たちがそれをしていなければ私たちは不従順の罪を犯しているのです。伝道について、ある人は「私は信仰が浅くてまだできません。」と言いますが、残念ながら、聖書はそのように教えていません。少なくとも、私たちは出て行ってキリストのすばらしさを語ることが出来ます。あなたが救われてそのことを喜んでいたら、救われた一人一人はその喜びを語ることが出来ます。なぜなら、神は奇蹟のみわざを自分の内に成してくださったからです。もし、していなければ不従順です。

聖書はこのように言います。「あなたは賜物を生かして教会で仕えなさい。」と。でも、私たちが教会に来てそのまま帰ってしまうならどうですか？不従順です。「いつも喜んでいなさい。すべてのことに感謝しなさい。」と、もし、していなければ私たちは不従順の罪を犯しています。「すべてのものよりもキリストを第一としなさい。」と、していなければ罪です。今日見て来たように「主イエスを覚えなさい。宣教の働きをしなさい。自らを吟味しなさい。」と、もし、私たちがそれをしていなければ不従順の罪です。

信仰者の皆さん、私たちは余りにも「罪」ということばを使いながら罪がどういうものなのかが分かっていないのです。悪いことをするだけが罪ではないのです。神の命令に従わないことは不従順の罪なのです。また、不信仰の罪があります。神が言われていることに対して、私たちはその約束を信じることができないのは不信仰の罪です。それゆえに、あなたの心を「心配」が支配していることがありませんか？「不安」があなたから喜びや希望、また、感謝を奪っていませんか？神の約束をなかなか信ずることができない、信じることが出来ない、これは不信仰の罪なのです。「私は信仰が弱いから、」とどんなに言い訳をしてもみことばが私たちに教えていることは、「罪だ。」ということです。私たちに必要なことは、その罪を神の前に告白して悔い改めて、そして、神の前に喜ばれることをすることです。ですから、罪を犯している、悲しいけれど私たちはみな罪を犯していますが、大切なことは、しっかりと自分を吟味して、自分の内から罪を除くことです。

2. 心を吟味する

もう一つ考えなければいけないことは、確かに、罪を吟味するのですが、私たちの心も吟味しなければいけません。正しいことをしている、でも、そこに心が伴っていないことがありますか？マタイの福音書 15：7-9、また、マルコ 7：6-7でも同じことを言っています。「偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。：8 『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。：9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」、口先で言っているけれど、彼らには心が伴っていないのです。たとえば、主を愛することは主の命令です。しかし、私たちの問題は、私たちが心から主の命令に従っているかどうかです。主の命令、主のおことばを心から愛してそれに従おうとしているかどうかです。

では、私たちの心が正しいかどうか、どうすれば分かるのでしょうか？礼拝が始まる前にスクリーンにみことばが映されています。詩篇 139 篇 23-24 節のみことばです。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。：24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」、著者が言っていることは「神さま、どうぞ私の心を探ってください。そして、あなたが私の心を見て喜ばれないものがあるなら、それを私に教えてください。」とそれが彼の祈りでした。「傷のついた道があるか、ないかを見て」と、彼は何を言ったのでしょうか？「自分自身の間違った行ない、また、悪い行ないによって神に痛みをもたらしめているなら、主よ、どうぞそれを教えてください。私はそれを告白します。」、みながしていることだからいいとか、私は弱いからできない、ではないのです。「主よ、私の心を探ってください。私が改めなければならぬことを教えてください。私はそれを改めます。」、なぜですか？「私はあなたを愛しているから、救われたことをあなたに心から感謝したい。だから、どうぞ教えてください。」と、このような思いをもって私たちは、神の前に立っているのでしょうか？このような祈りを神の前にささげていますか？

私たちは自分自身を誇ることを止めなければいけません。主は私たちがいかに罪深いのかを悟らせてくださるのです。あなたの心を、本当のあなたを知っている主を恐れて、私たちはその方の前にへりくだることが必要です。感謝なことに、こんなに醜い罪人を神は救ってくださった、そのことを覚えてこの方に感謝することです。その時に私たちは罪を除かなければいけないのです。もし、私たちがそれをしなければどうなるのでしょうか？そのことが最後に記されています。

4. 結果 29-32節

神によってさばかれるということです。29節から32節にそのことが記されています。覚えていただきたいことは、ここで言う「さばき」とは、罪人がさばかれて永遠の地獄に至るという、そのさばきではありません。ですから、32節に「しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」と記されています。救われているあなたには、永遠の地獄ではなく懲らしめが与えられると言うのです。神があなたを正しい方向に戻すために懲らしめを与えると言うのです。矯正するためです。主なる神は罪を憎んでおられます。だから、罪を犯した者への「主の懲らしめ」が記されているのです。29-30節「みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」、肉体的な死のことです。永遠の死、地獄に行くということではありません。もし、あなたが罪をそのままにして、「私は罪を赦されているから、」と、そのような態度で神の前に出るなら、神はあなたを懲らしめるということです。病になることがあるし、あなたのいのちが奪われることがあると言います。

パウロがここで言っていることは何でしょう？信仰者の皆さん、あなたは自分自身で自分をさばくか、それとも、神によってさばかれるか、どちらかを選びなさいと言うのです。私たちは自分自身で自分をさばきたいです。だから、いつも自らを吟味しなさいと言うのです。31節「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。」

結論：

さて、今日、私たちは聖餐式について見て来ました。これから私たちはその式に与ります。信仰者の皆さん、このパンはイエス・キリストのみからだを象徴するものであり、この杯はイエス・キリストが十字架で流された血しおを象徴します。どちらも、あなたのためにイエス・キリストが十字架で成してくださったみわざを象徴しています。

・主の贖いのみわざを覚える。主の苦しみを覚えて、心から感謝する。

主はこの贖いのみわざをあなたのために成してくださったのです。そのことを覚えて、そのことを心から感謝するのです。また同時に、

・主に感謝する者として、畏れをもって、主の前を正しく歩み続けること。

十字架を見上げることです。

アイザック・ワッツが書いた讃美歌138番、彼がこれを書いたのは1707年と言われています。アイザック・ワッツは聖餐式の準備をしていたときにこの讃美歌を書いたと言われています。皆さんよくご存じです。まさに、この讃美歌の通りです。

ああ主はたがため 世にくだりて、かくまで悩みを 受けたまえる。

わがため十字架に 悩みたもう こよなきみめぐみ はかりがたし。

とがなき神の子 とがを負えば、照る日もかくれて 闇となりぬ。

十字架のみもとに 心せまり、涙にむせびて ただひれ伏す。

涙も恵みに 報いがたし、この身をささぐる ほかはあらず。

私たちはこのような思いを抱きますか？イエスの十字架を見上げて、そこで血しおを流しておられる、まさに、死を迎えんとされているイエス・キリスト、その死を見る時に、この死、この苦しみは私の身代わりだと、そのことを覚えるときに、私たちはこのアイザック・ワッツが言ったように「十字架のみもとに心せまり、涙にむせびてただひれ伏す。」のです。そのような感謝をもって十字架を見上げていますか？そのような心からの感動をもってイエスの十字架を見えていますか？このアイザック・ワッツはこのように言います。「神への称賛を賛美することは、天国に最も密接に結びつける礼拝の主要な要素である。しかし、我々の賛美はこの地上において最悪である。」と。その当時は、詩篇を繰り返し歌っていたようです。しかし、彼は言うのです。賛美をどれ程見事に歌っても、心が伴っていなければ、主がお喜びにならない、それはむなしいと。

私たちが求めなければいけないのは、信仰的だというそのような洋服を着た信仰者ではありません。私たちが追い求めなければいけない信仰者は、キリストの十字架を見て涙を流している信仰者です。そ

れを心から感謝している信仰者です。そのために「わたしを覚えてこれを行ないなさい。」と、そのように主は命じたのです。

今から、私たちはこのパンと杯を皆さんにお配りします。あなたが考えなければいけないことは、今私は主の前にどのような姿で立っているのかです。主の前に立つにふさわしい者であるか？そのことをしっかり吟味して、そして、正しくないことがあったら、主があなたに罪を示してくださるなら、それを主の前に告白することです。そして、心からこの主の贖いを感謝することです。

お祈りしましょう。「恵み深い父なる神さま、あなたの尊い恵みを心から感謝します。生ける真の神が、我々を造ってくださったその神が、私たちの代わりに十字架で死んでくださった。私たちには理解しがたい愛です。ここまで神が私たちのために成してくださった。主よ、どうぞ我々が見上げる十字架が、イエスさまのいない十字架ではありませんように。我々が見上げる十字架は、私たちの罪のために血を流し、そのようにしてまでも我々を愛してくれたことを証してくれた、そのイエスさまの十字架であるように。神さま、我々の心に働いてください。私たちの心はひよっとしたら冷え切っているかもしれません。あなたのこのすばらしい恵みに対して感動を失っているかもしれません。今一度、私たちの心をよみがえらせてくださって、そして、あなたに心からなる感謝をささげる、そんな信仰者へと変えられますように。あなたの成してくださったすばらしい十字架の贖いのみわざに感謝し、この祈りをイエス・キリストの御名によって感謝します。アーメン。」

《考えましょう》

- ・ 私たちが主の贖いのみわざを覚えるとき、心から感謝が湧いてこないなら、その原因は何でしょう？
- ・ では、心から感謝が湧いてくるためには、どうすれば良いのでしょうか？
- ・ ご自身のいのちを捨てるという犠牲をもってあなたに救いを与えてくださった主に、あなたはどのように感謝を表わしますか？